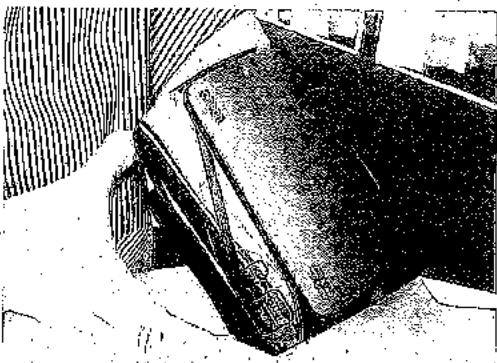


2017年3月、京都。お鉢など真ちゅう製の仏具製造から始まつた二九精密機械工業(京都市南区)が催した創業100周年の宴に、神戸財界を率いる神戸商工会議所会頭の家次恒(68)の姿があつた。家次は東証一部上場の検査機器大手、システムックス(神戸市中央区)の会長兼社長。社員約200人の二九精密に、主力製品の性能を左右する部品を頼る。

システムックスは1968年、神戸の音響機器メーカーTOAの医療機器販売部門が独立し発足した。企業の歴史は二九精密の半分。病気の治療や健康診断に使われる血液分析装置、薬剤を製造し、世界の需要を捉えて急成長した。

造船や鉄鋼など重厚長大の後に続くものづくり産業の育成が喫緊の課題である神戸の経済。生産拠点の海外移転が進む中、すべての機器を兵庫県加古川市の工場で生産し続けるシステムックスが時代をけ

## ④壁を越える



◎システムックスに納めるノズルを手にする二九精密機械工業の二九良三社長。試行錯誤を重ねながら8年かけて開発した(京都市南区・同社京都工場)

◎協和から部材の供給を受けるオムロンヘルスケアの血圧計。洗練されたデザインが特長だ(向日市・同社本社)

んとする。

家次は力をこめる。「不可能に挑む二九精密のような中小企業の存在が、メイド・イン・ジャパンの強みを生んでいる」

二九精密の本社工場。社長の二九良三(62)が、システムズ向けを開発した細身のノズルを手にかざす。直径2ミリ、内径0.6ミリ。形状記憶のチタン合金で、強い力で

湾曲しても、すぐに一直線に復元する。実用まで8年を要した。

血液分析装置は、医療現場から送られた採血容器のゴム栓にノズルを突き刺し、血液を吸い取って調べる。抜いたノズルを洗浄し、次の容器に突き刺す。これを自動で繰り返す。

刺さり所が悪くて曲がることがあり、従来のステンレス製だと担当者が出向いて交換するため、検査の遅れを招いた。

「曲がつても、元に戻れば装置を止めずに済むんだが」と。2003年、取引のあつた二九に新ノズル開発の打診があった。

良三は「断つたらそれまで。乗り越えれば新たな地平が広がる」と引き受けた。得意の構造だった。他社の設備を借り、パイプを伸ばして成形する工程を取り込んだ。さらに、血液成分がこびりつかないよう内部を磨き上げる設

備を社員が手作りし、搭載した。

こぎ着けた。家次の期待に良い三が呼応する。「困難な仕事に挑み続けたい」

ロンの健康機器製造子会社オムロンヘルスケア(向日市)が17年に売り出した小型血圧計は、プラスチックメーカー協和(大阪府高槻市)の兵庫県篠山市の工場が本体部品を担う。

ターゲットは40代。高齢者が使うものというイメージを覆す格好良さを追求した。腕に巻くカフと本体を結ぶチューブをなくして一体化させ、テーブルに置いても邪魔にならないデザインを考えた。スマートさを強調する光沢を放つ

ボディーが協和製だ。オムロンヘルスケアの担当者は「高い成形技術により、塗装をしなくても鏡のような外観に仕上げた」と満足げに話す。

関西の中小企業が蓄積した分厚い技術が、国産医療機器の躍進を支える。